

## 序 ギンズバーグの生涯

### 「死と名声」が予告した死

一九九七年三月三十日に肝臓がんと診断され、余命半年から一年と宣告されたアレン・ギンズバーグは、その日から友人たちに別れの電話をかけた。四月二日に病院から退院し、以前から内装を整えて入居するのを楽しみにしていた、マンハッタン・イーストサイドの眺めの良い自宅アパートに落ち着いた。書き物仕事をして、いつものように徹夜した。そして翌三日の日はベッドで休養し、四日朝、秘書ボブ・ローゼンタルが寝室を訪れると、脳卒中による昏睡状態で発見された。夜間に付き添うはずのピーター・オロフスキーが無断で外出していたため、容態が急変して深刻な病状の発見が遅れたのだろう。関係者が集まる中、五日午前二時半頃に自宅ベッドで息を引き取った。七十歳だった。一九六〇年に旅行した南米で受けた治療の際、使い回された注射針から感染したであろう肝炎

が死亡の遠因とされる。ジョナス・メカスが友人たちとの最後の別れを映像で記録した。「ニューヨークタイムズ」紙は一面に長い死亡記事を掲載したが、皮肉なことに、それはギンズバーグの生前に同紙が報じたどの記事よりも大きく、肯定的な報道だった。

余命宣告直後のギンズバーグが生前最後の詩「私ができないこと（追憶）」を完成させ、自分の葬式風景をユーモアたっぷりで描いた詩「死と名声」を含む最後の詩集となる『死と名声』を準備していた時、世界中のファンはそのニュースに驚いてできるだけ長い余命を祈った。にもかかわらず、その直後の死。打ちひしがれた人間たちの数、その思いはどれほどだっただろうか。

## 大学入学まで

一九二六年六月三日午前二時、アーウィン・アレン・ギンズバーグは、父ルイと母ナオミの第二子としてニュージャージー州ニューアークで生まれ、その後三歳から十八歳まで同州のパターソンで育つ。兄はユージン・ブルックス。ロシアからのユダヤ移民である父ルイの両親は、ユダヤ教のシナゴークよりも労働運動と社会主義に熱心だった。母ナオミはロシアで生まれ、八歳の時に家族でアメリカへ移住した。彼女の一家は共産党を支持していた。ルイは高校生の頃から詩を書いて発表し、高校でナオミと恋に落ち、ラトガーズ大学卒業後の一九一九年に結婚。パターソンのセントラル・ハイスクールで教師として四十年間教えながら、詩人としても活躍する。ナオミも少しの間小学校などで教えたが、一九一八年に彼女の母が亡くなった後に神経衰弱を発症し、その後長く続く統合失調症で苦

しむことになる。

子ども時代のギンズバーグは知的に優れていたことで、遊び仲間から「教授」「哲学者」と呼ばれることもあった。転校時にはユダヤ人とかかわられて孤独を感じ、読書に没頭するか、兄や従兄弟たちと遊んで過ごした。両親はクラシック音楽好きで、彼は九歳でヴァイオリンとピアノを習うが、練習には熱心ではなかった。十一歳からは日記をつけ始め、この習慣は生涯続くことになる。

子ども時代は質素な暮らしだったが、大きな痛みに満ちていた。母ナオミは熱心に共産党活動集會に参加し、菜食主義やヌーディズムを実践し、極端な行動によって家族を困惑させる。奇行や発作も激しくなる。家事をしている時に裸に生理用ナプキンだけを身につけた状態で足に血を流して息子を狼狽させたり、リストカットによる自殺未遂で救急搬送されたり、自分がスパイに監視されているという妄想も膨らんでいく。第二次世界大戦が始まり一九四二年に第一子のユージンが空軍に入隊すると、ナオミはファシズムへの恐怖から被害妄想に囚われ、病院への入退院を繰り返す。治療代が家計を圧迫し、一家の経済状況は悪化していく。ルイの母のレベッカがナオミの精神病を非難する状況下、ルイとナオミは離婚する。子どもながらも学校を休んで母の世話をしなさいと父に命じられたヤングケアラールであるギンズバーグは、一般的な母親の愛情表現を受けたのは一度だけだったと記憶する。クラスメートたちからいじめられ、泣いて帰宅して母になぐさめられた十一歳の時だ。その分、父と兄へのぬくもりを求めた。父には「キスのチビ虫」と呼ばれたほどに、キスしたがった。後に、母親への複雑な思いは「吠える」「カディッシュ」「白いかたびら」「黒いかたびら」などの詩に重層的に描かれていく。

文学や詩が身近にある環境で育ったギンズバーグは、パターソン・イブニング・ニュースに高校の出来事についてのコラムを書いて週二ドルの報酬を得た。英文学の授業では、その頃はアカデミックには認められていなかったウォルト・ホイットマンとハート・クレインの詩の魅力を学び、教師から助言を受けて伝統的な韻律の詩を書き始めた。そして卒業文集に初めて自分の詩が掲載された。思春期の性的な想念は少女ではなく少年に向き、ポール・ロスという一学年年上の先輩への恋愛感情を自覚する。ポールがコロンビア大学に進学後は彼に近づきたい思いで同大学を選んだ。

### コロンビア大学での停学を含む六年間

一九四三年夏、奨学金を得てコロンビア大学に入学。デイベートが得意なので法律家を目指すことも考えていた。しかし個人的な友人たちとの楽しい出会いから、アメリカ文学専攻に決める。停学を含むこの六年間は、時々ウツに陥り、死にたいと思いつつ死の恐怖に怯え、自分の存在を否定し、同性愛者の自分をどのように取り扱うのかに苦悩する期間だった。

当時は自然に反する性行動（肛門性交・口内性交・獣姦など）を禁じるソドミー法と呼ばれる法律が世界各地に存在していて、アメリカのほとんどの州では一九六八年の段階で同性愛は法律違反として罰せられる対象でもあった。精神医学として世界的に広く使われているアメリカ精神医学会の診断基準・診断分類によると、同性愛は一九五二年には精神異常、一九六八年では人格障害という基準が示され、一九七四年によりやく疾患の対象から削除された。つまり思春期のギンズバーグが悩んだ時

代の同性愛は、違法行為であり、精神異常と診断される治療対象だった。母ナオミが受けた電気ショック、インシュリンやメトラゾール投与など、現代から見ると人権侵害で拷問のような療法がなされていた精神病院の実情を知るギンズバーグには、より一層恐怖があっただろう。だから、誰にも口外できない秘密中の秘密であった。

学生生活では、後にビートジェネレーションと呼ばれる仲間たちと出会っていく。一年次のクリスマス休暇中、音楽をきっかけにルシアン・カーと知り合い、街中のジャズバーに連れて行ってもらう。また十一歳年上のウィリアム・パロウズと知り合い、カーからイーディ・パーカーとジョアン・アダムスを紹介され、そのつながりからヘンリ・クリュとパーカーの恋人であるジャック・ケルアックと友人になる。ケルアックは四歳年上で、マサチューセッツ州ローウエル出身、フットボールのスター選手だったが足の骨折でチームと大学を辞めていた。彼はどちらかというと内向的なタイプだが、作家になる意欲に燃えていた。ギンズバーグはケルアックに魅了された。彼らはパーカーとアダムスの住むアパートを拠点にして、芸術とドラッグとセックス、時には同性愛とバイセクシャルの性的志向も話題にして、酒を飲みながらマリファナを吸った。入学当初は魅力的に感じたコロンビア大学の文学の指導教授ライオネル・トリリングも保守的すぎると彼らは感じるようになり、自分たちで考えた「ニューヴィジョン」と呼ばれるアイデアを共有し、後のビート哲学につながっていく。それは、芸術とは抑圧された魂の解放であり、平坦で無意味で楽しくない世界を現実的に受け入れながら、高度に意識的に理解するという文学的態度だ。

そんな折、カーが殺人事件を起こす。カーより十一歳年上のデヴィッド・カマラーがカーに惚れ込

んでストーカーとなって、何年もつきまとっていた。一九四四年八月十四日、泥酔したカメララーはカーに性行為を強要して暴力的に迫った。抵抗したカーはナイフで刺殺した。新聞はカメララーの写真を載せて「善良で無実の少年に触ろうとした児童性的虐待者が報いを受けた」と報道した。当時十九歳だったカーは矯正施設に行くことになった。カーが殺人直後にパロウズとケルアックに相談したことから、二人も共犯と見做されたが保釈金で釈放された。後に、このことをケルアックとパロウズは共著の小説『そしてカバたちはタンクで茹で死に』に書く。

ギンズバーグは直接関与しなかったが、二カ月後この事件を題材に創作課題の小説を書きたいと指導教授に相談したところ、学部長から中止を命じられた。大学に失望したギンズバーグに追い打ちをかけるように、父ルイが学部長に呼ばれる。同性愛気質を許容できない学部長は、ヒゲを剃らず中古の衣服を着てドストエフスキーの登場人物のような、アイビリーグの学生らしくないギンズバーグの姿を、父ルイに注意する。その後、「窓への不適切な落書きと好ましくない外部者を宿泊させた」という理由でギンズバーグは停学処分を受ける。事実としては、ある夜ケルアックが大学寮のギンズバーグの部屋に宿泊し、翌朝、その窓にユダヤ人を侮辱する落書きが発見された事件だ。確かに連絡なしでの外部者宿泊は規則違反だったが、殺人事件で保釈された退学者ケルアックとの、同性愛を疑わせる行動が罰せられたようだ。

その頃ギンズバーグは、自分は思春期の葛藤を抱え込んだまま大きくなった少年の一人だと気づく。停学のため寮を出て友人たちと共同生活を始め、カーの友人でデンバー出身のハル・チェイスや、パロウズから紹介されたハーバート・ハンキーなど仲間が増えていく。ハンキーはドラッグディーラー

でジャンキーで同性愛者で街娼で、何よりもドラッグに関してのベテランだった。彼らはベンゼドリンやモルヒネ、ヘロインなどを摂取する。それでもギンズバーグは依存しないように常習を避け、体験したドラッグ類の使用歴と体感する効果・幻覚などをすべて記録する。

停学で卒業期が延びたことや家計が苦しいこともあり、経済的必要から海軍輸送部の艀装手に応募し、ブルックリンの海兵訓練所で訓練を受ける。気管支炎や肺炎を患ったりしながらも、訓練が終ると何度か商船に乗り込んで賃金を得た。一九四六年秋、復学のための診断書を学部長から要請されたので、おそらくギンズバーグ自身が文面を書いて医師が署名したと思われる書面を提出し、復学を許可された。

一九四七年、十六歳の妻ルーアンと一緒にデンバーからニューヨークにやって来たニール・キャサディをチェイスから紹介される。彼はのちにケルアックの『オン・ザ・ロード』の主人公のモデルとなる、ビートジェネレーションの不良青年キャラクターを体現する反抗的な若者だ。乱暴な素行ときらめく知性が魅力的なキャサディに一目惚れしたギンズバーグは、彼との間で様々な性交の快楽を経験する。ケルアックもキャサディに夢中になった。数カ月の滞在後デンバーへ帰ったキャサディに会いたくて、ギンズバーグは「死の暴力」という詩で得たジョージ・エドワード・ウッドベリー賞の賞金百五十ドルを旅費につき込む。しかしデンバーに行ってみたらキャサディには複数の女性の恋人がいて、辛い思いを味わう。傷心を抱えて、バロウズの住むテキサスに滞在する。

一九四七年十一月、父母は離婚しているため、保証人としてギンズバーグが母ナオミのロボトミー手術に同意署名する。この後、一生の後悔がつきまとう結果となる。

一九四八年には、詩人としての意識につながる「ブレイク体験」をする。ベッドでウィリアム・ブレイクの「ああひまわりよ」を繰り返し朗読しながらマスターベーションをしていたら、ブレイク自身の深い声が外部から自分に直接聞こえてきて、まるで聖人が聖母マリアの声を聴いた体験のようだった。宇宙の神秘が解き明かされたような感覚に襲われた。

一九四九年六月一日にコロンビア大学を卒業して英文学の学士号を得るのだが、その直前の四月に、ギンズバーグは初めて警察に逮捕された。自分のアパートにしぶしぶ同居させていたハンキーとその仲間たちの窃盗犯罪に巻き込まれたからだ。セラピストのコット博士から警察への「おそらく治療不可能なヘロイン中毒」という通知に基づき、父ルイとコロンビア大学のトリリング教授は、当局に、ギンズバーグに必要なのは懲役刑ではなく専門的な心理療法だと納得させた。そして翌年二月までニューヨーク州立精神病院に入院し、そこで患者のカール・ソロモンに出会う。

一九五一年九月、バロウズは妻のジョアンを事故で射殺した。この後もギンズバーグの周囲では、オーバードーズや自死、事故死、暴力による死などが断続的に発生する。

### シックスギャラリーでの朗読、『吠える、その他の詩』裁判

ギンズバーグは一九五〇年から同郷の大先輩詩人であり、地域の医者であるウィリアム・カールス・ウィリアムズとの交流を深めていく。インタビュウから始まり、会食し、パターソンの滝付近を散歩しながら文学的会話が弾んでいく。ウィリアムズはアメリカ人の日常的な話し方から詩的リズム

を見出し、「事物なしの観念はなし」(No ideas but in things) という詩的方法論を主張していた。そしてギンズバーグには「平凡な言葉で詩を埋めるよりも強度のある詩行を含む断片の方が良い、未完を恐れるな」と助言した。その言葉を得て伝統的な詩の形式から解放されたギンズバーグは、実験に挑戦していく。ギンズバーグからの長い手紙はウイリアムズの長編詩『パターンソン』文中に入れ込まれ、ギンズバーグ詩集の序文はウイリアムズが喜んで書いてくれた。またギンズバーグが「死は怖いですか?」と質問したら、六十八歳の医者ウイリアムズも「イエス」との答えだった。死の不安を共有してもらえて、うれしく心強く思った。

サンフランシスコでは一九五三年にローレンス・ファースティングティによる独立系書店・小出版社シテライツが開店し、ケネス・レクスロスを中心にサンフランシスコ・ルネサンスと呼ばれるムーブメントが動き出していた。第二次世界大戦中の良心的兵役拒否者やアナキストたちがボヘミアン文化のサンフランシスコに集まってきて、反権威主義、自由主義、反戦主義の芸術運動を実践していった。パリにある、ファースティングティの友人ジョージ・ホイットマン経営のシェイクスピア書店と同じく若い作家の文学活動を応援するシテライツでは、朗読会、ブロードサイド(一枚の紙に詩が印刷されたもの)・ジン(個人的小冊子)・文庫版詩集の出版が行なわれた。サンフランシスコ文学の重鎮であるルース・ウィット・ディアマントはカルフォルニア州立大学にポエトリーセンターを設立し、これらは詩人たちの拠点となっていく。戦争中は良心的兵役拒否を貫いたレクスロスは博学で、独学で中国語など多くの言語に通じ、FM放送で時事問題や文学や書評を独自の観点で語り、自宅で文学サロンを開催して若手詩人たちを勇気づけていた。ギンズバーグは、このサロンや書店やカフェでローバ